



あおもり 町連だより

第230号

令和6年7月発行
青森市町会連合会
〒030-0801 青森市新町一丁目3-7
TEL 017(734)2584
FAX 017(734)2587

笑顔で過ごせる町会に

令和6年度 総会 開く

青森市町会連合会の令和6年度定時総会が5月28日、ホテル青森で開かれました。青森市(赤坂寛副市長)、市議会(木戸喜美男副議長)、青森警察署(清野るみ子地域官)から来賓を迎え、町会長ら約200人が出席し、6年度の事業計画、収支予算など議案5件を原案通り承認しました。

このうち任期満了に伴う会長、副会長らの選出は昨年12月の臨時総会議決をもって常任理事の互選に基づくことになり、会長に佐々木重光氏(再)、副会長に松本勝義氏(再)と鈴木茂氏(新)を推す案を承認。また監事には福山保氏(新)と高橋俊治氏(再)、佐々木昭正氏(新)とする案も承認されました。

【退任町会長、優良町会員の 受賞者は2面に】

佐々木重光会長は「昨年は町会連合会の組織全体の改革について検討を深め、簡素な組織で充分機能し得るとして十二月の臨時総会で関連議案の承認をいただき、その実現に向け鋭意取り組んでいるところです。その結果、5年度の決算は運営費、事業費とも経費節減に努め、6年度は組織改革により予算規模はさらに約8%減としました。組織一丸となった活動を原点に



組織改革という節目の第一歩を踏み出した定時総会

『ふれあい・助け合い・支え合い』の地域みんなのチカラで、地域住民みんなが明るく笑顔で過ごせる町会づくりを推進し、新たな取り組みも進めたいと考えております」と、町会連合会にとって新たな節目の第一歩を踏み出す決意を述べました。

基本方針

青森市町会連合会の目的である「各町会の連絡協調と住民の福祉増進を図り、豊かで住みよいまちづくり」のため、活動を推進します。

少子高齢社会の進展と人口減少等により、地域力の強化が喫緊の課題となっている中で、町会が地域コミュニティの中心的な役割を引き続き

担っていくために、町会連合会が今後もその役割を果たし続けられるよう、見直しを進めます。

- (1) みんなで考え、みんなで参加し、みんなのチカラでまちづくりを進める
- (2) 地域への誇りと愛着心を持ち、明るく笑顔で暮らせるまちづくりを進める
- (3) お年寄りなどが安心して暮らせるまちづくりを進める
- (4) 安全で快適な暮らしができるまちづくりを進める
- (5) 健康づくりの盛んなまちづくりを進める
- (6) 青少年が健やかに育つまちづくりを進める
- (7) 文化の香りがするまちづくりを進める

退任町会長・優良町会員を表彰

青森市町会連合会は6年度定時総会で表彰規定に基づき、退任した町会長28名と優良町会員97町会112名を表彰しました。受賞者を代表して櫻田文信さんが「受賞は家族や町会の皆さまなどと頂いた栄誉。感激を忘れることなく、今後とも地域社会のために微力を尽くして参りたい」とあいさつしました。

(敬称略、カッコ内は町会名、勤続年数)

□20年以上勤続し退任

櫻田文信(野木、25)高崎國治(浜町、22)

□5年以上20年未満勤続し退任

津川實(築木館、14)鈴木義光(滝沢、5)故・石



優良町会員の似内さん



町会長を25年務めあいさつする櫻田さん

塚隆雄(みはらし、10)穂元耕治(佃北、6)故・木村俊昭(佃本町第一、10)故・佐々木徳弘(福田、15)宮西勇(花園第一、10)佐々木一夫(花園第二、15)故・館山一弘(茶屋町南、16)三上隆夫(戸山が丘、14)黒瀧敏博(上三上町、8)高村美範(岩渡、11)我満勝彦(孫内、12)故・今良治(出町、5)飯田祥生(切島、15)太田明(浪館第四、17)太田智三(横内、18)故・佐野正昭(山田町、12)長井勇一(奥野第一、11)伊藤博夫(妙見第二、18)浅石正俊(松森町、14)神保修平(堤橋、13)早野功(橋本南、8)故・和田正彦(上新町、15)竹内誠一(緑町、17)工藤喬也(勝田中央、13)

□優良町会員

似内和子(南金沢)ほか111名

6年度の主な活動

◇総務部会

- ・定時総会等の開催
- ・新任町会長研修会、理事研修会の開催
- ・青函ツインシティ交流研修会の開催
- ・企画部会における事業など、町会連合会の活動全般に係わる検証

◇企画部会

- ・町会役員等後継者育成対策

- ・生活環境の向上等快適なまちづくり対策
- ・自主防災対策



総会に出席した町会長たち

- ・町会コミュニティ活動及び町会加入対策
- ・交通安全対策

◇女性部会

- ・女性部会勉強会の開催
- ・町内女性(婦人)部役員研修会の開催
- ・町内女性の集いの開催

訃報

西部第4区 出町町会

町会長 今良治 殿

令和6年3月12日ご逝去



桜川南町会

町会長 太田 健一

南に雄大な八甲田

当町会は、南は青い森鉄道とその北側には県営住宅南桜川団地、北は桜川団地、東は駒込川、西は筒井町会に囲まれた戸数160世帯ほどの小ぢんまりした町会です。

南には八甲田連峰が広がり、その雄大な姿は、私たちの毎日を心安らぐ日々にくれています。

町内には商店街などはなく、ほとんどの方が市の中心部等へ働きに行くベッドタウンとなっています。

「顔見知り」になろう

このような環境もあるので、私が町会役員になった平成24年には、町会の皆さんが接する機会は少なく、参加する行事もほとんど



「松桜橋から八甲田を望む」
(太田健一・洋画、町会40周年記念誌表紙より)

ありませんでした。
何か交流を深め、挨拶を交



なかよし緑地整備の参加者



介護保険の勉強会も開催

わすような「顔見知り」になれる機会はないものかと考え、最初に始めたのが「うたごえ桜川南町会」という、昭和30年代のうたごえブームを再現する、「里の秋」「赤とんぼ」「学生時代」などのなつかしい歌をみんなで歌う行事でした。

翌年からはお花見やカラオケ教室、ストレッチ教室、健康講座や防災講座、秋祭りなどを順次行ってきました。

また、町会大清掃、なかよし緑地の整備などには年々多くの方が参加するようになりました。

2020年(令和2)は町会40周年の年で、記念事業として、ごみ収集小屋の改修、記念誌の発行、記念品(アップルライト)と祝菓(青い森)を配布しました。

町会に若い人の声

最近では年配の方が年々増えていることから、ロコモ予防トレーニング、介護保険講座等を実施しています。また、町会役員の若返りを図り、町会行事を担当してもらうほか、若いファミリーの声を町会運営に反映するように心がけています。

ホームページをご覧ください

青森市町会連合会のホームページは町会の広報紙も掲載しています。
パソコンでもスマートフォンでもご利用いただけます。
アドレスは次の通りです。
<https://aomori-choukairen.jp>

下記QRコード
からもアクセス
できます



いにしへの「町名」「通り」を知ろう

近現代編⑫

疲弊する油川が「飯詰新道」

工藤 大輔編集委員
(市民図書館歴史資料室長)

確かな史料による歴史像

私の大学院時代の先輩の著書に「確かな歴史事実は、確かな史料から導かれる」という言葉が綴られていました。これは当然のことなのですが、そうすると「確かな史料」がほとんど存在しない地域などでは「歴史叙述」の空白が生じかねないことになります。

そうした際、しばしば利用されるのが「確からしさ」にいくらかの不安を抱えた「編さん物史料(後の時代に書かれたもの)」となります。こうした史料は、編さんの意図などをしっかり踏まえて読まなければならないので、どうしても扱いにくさがあります。

大瀬熊三郎『油川沿革誌』

そうした事情をふまえつつ、今回は明治25年(1892)に大瀬熊三郎が編集した『油川沿革誌 全』(以下『沿革誌』と略記)という記録を用いて話を構成します。

大瀬は明治25年時点で「今ヲ距ル六年前」、すなわち明治19年(もしくは同20年)に油川尋常小学校に赴任した教師で、後に村長・町長を務めた西田林八郎の家に身を寄せていました。

西田は油川の歴史に関する資料を集めなければ将来散逸してしまうことを危惧するものの、ちょうど家業を継いだばかりで「商界繁忙ノ身」であることから、これを大瀬に託しました。

大瀬は明治23年5月から筆を執り、三上与禄という支援者(資料提供者)を得、同25年10月に『沿革誌』を完成さ



油川尋常高等小学校校歌(絵はがき) 明治末期(歴史資料室蔵)

せました。

なお、歴史史料としての『沿革誌』は、編さん物史料として位置付けられます。

油川・飯詰村の道路開削

大瀬が油川に着任して間もなくの明治21年、油川村は北津軽郡飯詰村(現五所川原市)へ通じる道路が開通しました。『沿革誌』によるとこの道路は西田林八郎・三上与禄・中川九兵衛の3氏が企画したもののようです。

西田・三上両氏は大瀬に近い存在なので、事実関係に大きな誤りはないと思いますが、後の刊行物では明治20年11月6日にこの道路は竣工したと記すものもあります(間違いではありません)。

さて、ここで注目したいのは、大瀬はこの道路開削を明治4年開通の青森町・新城村間を結んだ石神野新道(『あおもり町連だより』第224号参照)と関連づけているところにあります。

大瀬が目にした「近代化」

すなわち、青森町への近道となる石神野新道の開通により、油川村はまずは「商工頓ニ衰ヘタリ」と経済面で打撃を受け、さらにそれが「延テ農民ニ及ブ」と農業面にまで及んだと大瀬はいいます。

油川村は商業と農漁業でなりたっているのので、ほぼ村全体が疲弊したということになります。こうした状況下での飯詰村への道路開削は「北郡ノ米穀貨物ヲ当邑ニ輸シ、以テ一村ノ利益ヲ謀ラントス」るものであったと大瀬は見立てています。

そして、この「疲弊」の背景として大瀬は石神野新道をあげています。これを裏付ける史料はありませんが、県都青森が誕生し、この後明治24年に開通する鉄道もそうですが、青森町に集中するインフラ整備が周辺村を疲弊させた—そんな近代化の一面を大瀬は油川村で感じ取っていたのでしょう。